

国内経済情勢

概観

公共投資や電力投資の需要効果は引き続き順調に浸透しており、個人消費も緩やかな回復過程をたどっている。反面、輸出数量は5か月連続して前年水準を下回った。こうした状況下で、8月の生産、出荷は前月減少のあと再び増加を示している。この間製品在庫は4か月連続して減少した。

8月の国際収支は貿易収支・経常収支とも季節調整後ではほぼ前月並みの黒字となった。為替市場においては、円相場は9月中おおむね落ち着いた動きをたどった。

こうした中で9月の商品市況をみると、官公需の堅調な動き等に支えられて底固い推移をたどっているが、一方で割安輸入品の流入漸増等を映じて軟化を示す品目もみられた。9月の卸売物価は、4か月連続の下落を示したが、為替円高の一服もあって当月の落込みは小幅にとどまった。また9月の消費者物価(東京)は主として季節的要因からかなり上昇したが、前年比上昇率では4.3%と落ち着いた推移をたどっている。

金融面をみると、8月のマネーサプライの前年比伸び率は12.3%と前月に比べやや伸びを高めた。この間、9月の公社債市況は、月末近く小反発を示したものの、月中おおむね軟調裡に推移した。

製品在庫は4か月連続の減少

8月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比*、速報)、同出荷(速報)は、前月減少(各-0.8%、-1.2%)のあと、それぞれ+0.9%、+0.7%の増加となった。この間、生産者製品在庫(速報)は-0.2%と小幅ながら4か月連続して減少した。

* 以下増減率は特に断わらない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

生産・出荷動向を業種別、財別にみると、家電製品(エアコン、電気冷蔵庫等)が前月著伸のあと反動減を示したが、反面公共投資関連財(土木建設機械、コンクリート製品、橋りょう、小形棒鋼等)や電力投資関連財(電力通信ケーブル、産業用電気機械等)は生産・出荷ともかなりの増加を示した。なお、普通鋼鋼材、非鉄金属加工品、紡績等素材業種の生産もやや増加した。

この間製品在庫の動きをみると、小型自動車、繊維二次製品等消費財が積上りをみたものの、一般資本財が土木建設機械、電力通信ケーブル等を中心に減少したほか、生産財も小幅減少を示した。

国内最終需要の動向をみると、8月の公共事業契約額(前年比)は+6.4%と引続き前年を上回っており、8月末現在の契約進捗率は66.6%に達した(前年同65.3%)。また9月の公共事業請負額(前年比)も+24.1%と高水準を維持している(前月同+20.7%)。

設備投資動向については、8月の機械受注額(船舶を除く民需)は+31.7%とかなり増加した。

業種別には電力・石油等からの受注が大幅に増加したのが目立つ。

消費面では、8月の全国百貨店売上高(百貨店協会調べ、前年比)は衣料品の落込みや食料品の伸び悩みを映じて+2.8%と低い伸びにとどまった。もっとも9月に入って都内百貨店売上高にはやや持直しがみられ、乗用車新車登録台数(前年比、速報)も+22.6%と再び伸びを高めるなど、ならしてみれば消費は回復傾向を持続している。

雇用情勢をみると、8月の常用雇用(全産業)は前月微減のあと横ばいにとどまり、完全失業率も2.34%と前月並みの高水準を続けた。もっとも有効求人倍率は公共投資、住宅投資関連業種の新規求人増を映じて0.57倍と小幅ながらも3ヵ月連続して上昇した。

卸売物価の落込みは小幅

9月の商品市況をみると、官公需関連品目(セメント、合板、小棒)や非鉄(銅、鉛)は需要面の底固い動きを映じて堅調に推移したが、石油製品、合成樹脂等はこれまでの円高に伴うコスト低下を主因に、また一部繊維(綿糸、ポリエステル糸)は輸入玉の流入や輸出減退懸念などから弱含むなど、軟化を示す品目もみられた。

9月の卸売物価は4ヵ月連続の下落を示したが、為替円高が一服したこともあって当月の落込みは-0.1%の小幅下落となった。品目別には紙パ、石油製品等は需給引緩みから下落したが、その他の品目はおおむね横ばい圏内に推移した。

一方、9月の消費者物価(東京、速報)は衣料品の秋冬物への入替えに伴う上昇のほか、野菜等季節商品の統騰もあって+1.3%とかなり上昇したが、消費者米価据置きもあって前年比上昇率では+4.3%と前月(同+4.6%)に比し伸び率はやや低

下した。

マネーサプライの伸び率はやや上昇

9月の金融市場をみると、銀行券は671億円の発行超(前年1,076億円の還収超)となり、月中平均発行高(前年比)は+10.4%とほぼ前月並みの伸びとなった。一方財政資金については、地方交付金の支払増や資金運用部の対市中国債買入れ等から一般財政の払超幅が前年を大幅に上回ったため2,585億円の払超となった(前年2,227億円の揚超)。この結果、月中の資金過不足額は1,604億円の余剰(前年1,433億円の資金不足)となり、日本銀行はこれを主として貸出回収で調整した。

この間コール・レートは上・中旬中小刻みな低下を示したあと、下旬に入って小幅上昇したが、通月では0.375%の低下となった。一方手形売買レートは季節的資金余剰期入りを映じて4日、28日にそれぞれ0.125%ずつ低下した。

8月のマネーサプライ(M₂平残、前年比)は+12.3%と前月(同+12.0%)に比べやや伸びを高めた。その内訳をみると、対政府信用の寄与度がかなり上昇している。この間、金融機関の融資動向を全国銀行貸出(銀行勘定)の推移でみると、8月の貸出残高(前年比末残)は+9.0%と前月比やや伸びを高め、9月(速報)も+9.4%となった。なお8月の全国銀行貸出約定平均金利は-0.047%低下し、月末水準は6.126%と引続き既往最低を更新した。

9月の公社債市場では、新発国債の消化が証券引受額的大幅削減にもかかわらず引続きはかばかしくなく、また農林系統等買い手筋の買控えの姿勢もあって、市況は月末近く小反発を示したものの月中おおむね軟調裡に推移した。一方株式市況は月初よりほぼ一貫して上伸歩調をたどり、既往

高値を更新して越月した(東証指数月末434.94、
月中+10.65)。

総合収支の黒字幅縮小

8月の輸出(通関、ドルベース)は2か月連続して減少したあと、数量の反動増もあって前月比+7.2%となった。もっとも輸出数量の推移を前年比で見ると、4月以降5か月連続して前年水準を下回っている。8月の輸出(通関、ドルベース)を品目別にみると、このところ減少傾向をたどっている船舶等が当月は一時的要因もあって増加した。その他の品目では光学機器、テープレコーダー、事務用機器等が前月に引続き増加した反面、繊維製品、テレビ等は減少をみている。

他方8月の輸入(通関、ドルベース)をみると、

鉄鉱石、綿花等は減少したが、原油は前月に続き増加し、また機械機器、一般消費財などの製品輸入も高い伸びを示したため、+11.1%とかなりの増加となった(前月同+7.8%)。

8月の国際収支は上記輸出入の動向を映じて貿易収支・経常収支(季節調整後)ともほぼ前月並みの黒字にとどまった。この間長期資本収支は引続き大幅な流出超となり、総合収支では346百万ドルと黒字幅を縮小した(前月同853百万ドル)。

9月のインターバンク米ドル直物相場は上・中旬中前月末以来の地合いをうけて、おおむね190~193円台で推移したが、下旬に入ってやや円高に転じた(月末189円15銭、月中85銭の円高)。

(昭和53年10月13日)